

〔御伽名代紙衣四〕遣ひ盛の花の縁結び目の解けた太夫

華車洒落たる肴とて、櫻の花に酢味噌とり合せて、蒔繪の硯蓋にのせて持つて出られ、略下

〔茶道筌蹄五〕總菓子盆○中略

菊の繪硯蓋 桐木地錫緣菊の繪花は胡粉、葉は紺青なり、宗全好、

〔茶式湖月抄二篇下〕菊繪硯蓋

外法 大サ八寸七分四方 高壹寸二分 但内法 板厚壹分半 裏壹分シ、ツケ カドノメン

二分三厘 スヽノイカケ貳分 高サ壹分

〔數寄道具定直段附〕指物師利齋

菊繪硯蓋 貳拾五匁

〔數寄道具定直段附後篇〕一閑張筐屋才右衛門

硯蓋 四匁五分

〔下學集器財〕菓子盆

〔書言字考節用集七〕盆 本朝俗謂之「益」器爲益、義未詳

〔物類稱呼四〕盆ばん 中國にて、ばにといふといふごとに蘭をらに、紫苑をゑごとにはねる也に

〔和漢三才圖會三十〕盆 音盆 瓮同 益音翁 和名比良加 俗云保止岐 今只用字音呼

按、益凡擂盆果子盆之類、上濶下窄而深、陶器也。然今緣僅寸許、如盤捲物皆稱益、以爲配膳之用、或代食机、其深者皆稱益、如此有古今名義相反者、亦不少。

〔西鶴織留〕津の國のかくれ里

其後は江戸酒貸銀田畠を求め、棟高ふ作りて住なし、心よき春をかさね、元日の嘉例とて、父親は胸前垂して蓬萊を丸盆に組つけ、代々伊勢海老なしにいはひける。